

昭和女子大学教職課程研究報

EduMate

vol. 9

【特集】先回りする教育、私のビジョン

LIFE Based Education を根幹とした教育課程の提案
—いのちを見つめ、生活を生き生きさせ、よりよい生き方へとつなぐ—

「きょうよう」と「きょういく」と
—「江戸川総合人生大学」での20年—

専任が語る

教師に「その瞬間」は突然訪れる……

教育的愛情が生徒指導の基盤を作る

高校魅力化はどこに向かう？

教育の最新事情

型とその伝承、そして教育（二）「守破離」と踊り場の効用

【特集】先回りする教育、私のビジョン

LIFE Based Education を根幹とした教育課程の提案

- いのちを見つめ、生活を生き生きさせ、よりよい生き方へとつなぐ—
 「きょうよう」と「きょういく」とー「江戸川総合人生大学」での20年—

3

6

専任が語る

教師に「その瞬間」は突然訪れる……

9

教育的愛情が生徒指導の基盤を作る

11

高校魅力化はどこに向かう？

13

教育の最新事情

型とその伝承、そして教育（二）「守破離」と踊り場の効用

15

先輩はもがく、されど進む

17

Pickup News

19

昭和女子大学教職課程研究報

EduMate

vol. 9

学校が、先生が、疲れている……。そう感じているのは私たちだけでしょうか？「あれもこれも」と新たに求められることが雪だるま式に増え続け、パンク寸前の学校現場……。悲鳴があちこちから聞こえてきます。たしかに学校は変わらなければいけない、でも、今の改革論議や各種政策に、現場はどこまでワクワクしているでしょうか？ 学校や先生たちの主体性や創造性にもっと目を向ける必要があるのではないのでしょうか？

「言葉踊る」教育改革の後追いに別れを告げ、「心躍る」先回りする教育で先手を打ちたい。「こうあるべき」ではなく、「こうありたい」を大事にしたい。私たちはそう考えています。この先の社会で求められることは何か？ その本質はどこにあるのか？ 私たちはどのような未来を望むのか？ 本当に大事なことは何なのか？ もちろん、未来を思い通りにできるなんて思っていません。しかし、望む未来の実現に向けて、自分たちの態度や思考、行動を選択することはできるはずで

す。こんな想いのもと、今号から「先回りする教育、私のビジョン」という新たな特集をスタートさせます。まず、手始めに本研究所の歴代所長にビジョンを語っていただきました。今後も連載していく予定です。教育業界のみならず、様々な分野の方々に、私ならこう考える、こんなのだらう？ を披露してもらいます。一つの刺激として、読者のみなさんも、私なら、を考えるきっかけにして頂けると嬉しいです。先回りに正解はありません。探究⇒共創の旅路、ぜひ一緒に。

【特集】

LIFE Based Education を根幹とした教育課程の提案

—いのちを見つめ、生活を生き生きさせ、よりよい生き方へとつなぐ—

はじめに

—自分軸を強くし社会と関わる

これからの社会は、ICT技術の飛躍的發展により、ますます予測不可能な社会になっていきます。その中で生きていく人間を育てる学校教育においては、どうしても社会の変化への適応を中心とした教育課程が重視されます。それは大切なことですが、生きる主体である子どもたち自身の自己形成があやふやな状態では、不安感が増し、社会の変化に振り回され、幸せな生活からは遠ざかっていきます。

社会が変化すればするほど、自分軸（自己形成軸）を強くしていく必要があります。確かに、私たちは社会のなかで生きていかねばなりません。しかし、その社会を創っているのは、私たちです。主役は、私たちであり、私たちが、新しい社会を創っていくという意識をもつことにより、生きがい感ややりがい感が育まれ、未来に希望や夢をもつことができま

す。それは、新しい自分を切り拓いていくことでもあり、教育の本質であるといえます。

つまり、どう生きるかを考えるのに、社会を軸にして考えるのではなく、自分軸を確かなものにして、そ

の関わりで社会の中で自分らしくどう生きるかを考えるようにすることが大切だということです。

そのために、どのような学びが必要でしょうか。私たちは、生身の人間として生きています。この生身の人間としての自分自身のいのちについて、しっかりと認識することから、この社会の中で、自分のいのちを輝かせるにはどのようなことが大切かを考え、自分らしく追い求められるような力を培う学びが大切ではないでしょうか。学校教育は、そのことを最大限叶えるような教育課程を工夫する必要があります。その根幹に位置づくものとして、LIFE Based Educationを提案したいのです。

1. LIFE Based Education の意

いのちは、「生きんとするエネルギー」ととらえます。「生きんとするエネルギー」が枯渇すれば、いのちは止まってしまいます。「生きんとするエネルギー」をいかに燃やし続けるか、それが究極の生きる課題になります。そのことを押さえて論を進めていきます。

いのちは、英語では「FE」です。「FE」を辞書で確認すると、「生命」、「生活」、「人生（生きがい）」「活力」

が記されています。英語の「FE」を基に考えると、いのちの教育のポイントがはっきりします。つまり、「FE（いのち）」とは、生きんとするエネルギー（生命）を充実させ、日々の（生活）をいきいきさせて（活力）、夢や目標を追い求めて生きがいのある（人生）を送れるようにする営み、ととらえられます。

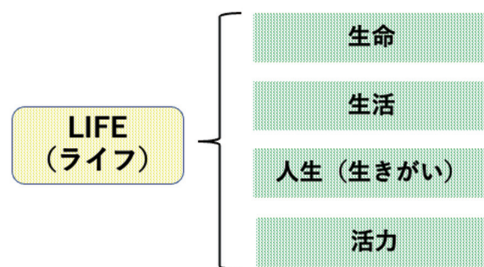


図1 LIFEの意味

2. LIFE Based Education のポイント

以上のことを基に、LIFE Based Educationのポイントを次のように押さえます。

(1) 生きんとするエネルギーをいかに充実させるか

「生きんとするエネルギー」は、だれもがもっています。それを少して

も高める取り組みが必要です。大きく3つを提案します。

①「内なるエネルギー」を表出させること

「生きんとするエネルギー」は、「内なるエネルギー」が動き出せば、身体的表現となります。その表現を、自由にできるようにするのが、例えば、体を思いっきり動かしたり、大きな声を出したりする。また、何かに夢中になる。あることに集中する。それらは、「内なるエネルギー」を表出していることとなります。

② 身体や神経を休ませること（「内なるエネルギー」の休息と補給）

「内なるエネルギー」を表出させるには、身体や神経を休ませたり、補給したりすることも大切です。例えば、快眠、ヨガや太極拳や体をリラックスさせる体操や運動、さらに、肌のマッサージなどは、身体や神経を休ませるために効果的です。瞑想も、「内なるエネルギー」を蓄えていくことができます。

③ 感覚器官を研ぎ澄ますこと

「内なるエネルギー」は、感覚器官を磨いていくことで活性化されま

す。そこから様々な感情が生まれま

す。そして、価値あるものに気づくことを通して、感性が発達します。さらに、価値あるものを求めようとする情操が培われていきます。そこから、人間らしい心が養われ、様々な文化や芸術が創られていきます。

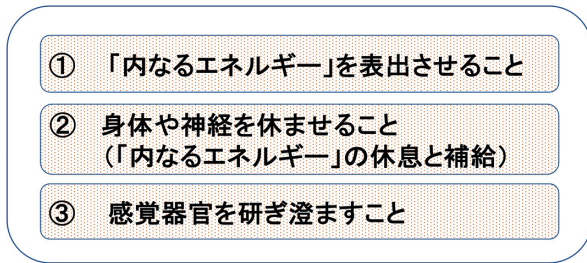


図2 生きんとするエネルギーをいかに充滿させるか

(2) 生活をいかに生き生きさせるか

「生きんとするエネルギーを充滿させる」ことは、「生活を生き生きさせる」ことへとつながっていくことが大切です。生活をするとは、様々な関

わりをもつことです。生活を生き生きさせることは、様々な関わりを豊かに

もつことだといえます。特に大切な関わりとして、次の点が挙げられます。

① 基本的な生活習慣の確立

まず、自分との関わりにおいて大切なものが、基本的な生活習慣の確立です。それは、生活のリズムを創ることにもなります。生活習慣で特に大切なのは、「食べる」、「活動する」、「寝る」です。「活動する」においては、運動をすると同時に、様々な関わり（特に、人、集団や社会、自然や動植物、崇高なものとの関わり）を豊かにする体験が大切です。これらをいかに習慣化するかが、大きな課題になります。

② 様々な人々と関わる

生活で関わりをもつのは、まず人々です。人は、それぞれに個性をもっています。その個性をもつ人々と仲よく関わることによって、自分の個性が磨かれますし、可能性を拓いていくことにもなります。人間は、人々と比較する特性をもっています。それが差別意識や優劣感をもってしまう場合もあります。そこをどう克服するかは大きな課題です。

③ 家庭、学校、地域を生活の拠点

にし、社会と関わる

子どもたちが生活する場合は、家庭、学校、地域です。関わりを深めることは、対象への愛着を育むこととなります。そのことによって、関わりが多様になり、深められていきます。

家庭、学校、地域は、子どもたちにとっては連続的な生活空間です。それらの特性を理解しながら、主体的にかかわれるようにしていくことが大切です。それは、様々な社会的役割の取得ともなります。そこをベースとして、関わる集団や社会を広げていくことが重要です。

④ 自然や動植物と関わる

私たちは、自然の中で生きています。その自然は、生きており、四季折々の変化を楽しませてくれます。自然を愛で、全感覚器官で触れ、育て、楽しむことは、心のエネルギーをリフレッシュしてくれます。しかし、自然とのかかわり方を間違えると、自然破壊や環境問題を引き起こします。そうならないための関わり方を身につける必要があります。

⑤ 崇高なものとの関わりを意識する

日本国憲法にも、前文に、「崇高な理想」という形で「崇高」が使われています。「崇高なもの」とは、「追

「求める究極の理想のもの(姿)」といえます。人間のいのちも、精神も、懸命に生きていく姿そのものも「崇高なもの」ととらえることができます。それは、よりよい自己や社会を創っていくための根幹に位置づきます。

- ① 基本的生活習慣の確立
- ② 様々な人々と関わる
- ③ 家庭、学校、地域を生活の拠点にし、社会と関わる
- ④ 自然や動植物と関わる
- ⑤ 崇高なものとの関わりを意識する

図3 生活をいかに生き生きさせるか

(3) 自分や社会の未来をいかに拓いていくか

「生きんとするエネルギーを充実させ」、「生活を生き生きさせる」ことが、「自分の人生や社会の未来を拓いていく」ことにつながるが大切です。そのためには、特に道徳教育とキャリア教育が重要になります。

①どのようになりたいか(自分軸)をはっきりさせること

「生きんとするエネルギーを充実させる」のも、「生活を生き生きさせる」のも、自分自身です。それを、どこに向かわせるのか。目指す方向を決めることが大切です。それは、どのように生きたいか(自分軸)をはっきりさせていくことでもあります。夢や希望をもち、目指す目標に向かって、様々な学びや関わりを発展させていくことが重要です。

② 出会いや発見の喜び、自己達成感を実感すること
そのためには、様々な知識や技術、様々な関わりにおける出会いや発見の喜びがあること。さらに、目標に向かって進んでいるという自己達成感を感じ取れるようにしていくことが大切です。

③ 自己有用感を実感すること

そして同時に、自分が相手(人々、集団や社会、自然)に役に立っている、喜んでもらえているという自己有用感を感じ取れるようになることで、それは、相手に対する敬意や感謝の心を育むことにもなります。そのことで、相手とのかわりは、より深められていきます。

④ 自己成長の実感と生きがい感を培

うこと

これらを通して、自分が人間として成長していることを実感できることが大切です。それは将来への夢と希望につながります。それを継続することによって、生涯を通して生きがい感をもつて生きることが出来ます。

- ① どのように生きたいか(自分軸)をはっきりさせること
- ② 出会いや発見の喜び、自己達成感を実感すること
- ③ 自己有用感を実感すること
- ④ 自己成長の実感と生きがい感を培うこと

図4 自分や社会の未来をいかに拓いていくか

3. LIFE Based Educationを根幹とした教育課程

これからの学校における教育課程は、社会の変化や課題に対応した多様な改革が行われます。その学びを「LIFE(生命、生活、人生、活力)とかわらせて発展できるようにすることを提案したいのです。つまり、各教科等の多様な学びを「LIFE」につなげていくこと、そして各教科等の固有の学

習内容の中に、「LIFE」に関わる内容を位置づけていくことです。そのような教育課程を通して、一人一人が自分軸を強くしながら、社会と主体的にかかわり、よりよい自己、よりよい社会を創っていくことができるのではないかと期待します。

主な参考文献

J. デューイ著、松野安男訳『民主主義と教育(下)』岩波書店 1975

J. H. ミード著、船津衛・徳川直人編訳『社会的自我』恒星社厚生閣 1991

F. ジュリアン著、中島隆博・志野好伸訳『道徳を基礎づける』講談社 2017

W. デイモン・A. コルビー訳『モラルを育む(理想の力)』北大路書房 2020

M. スロート著、早川正祐・松田一郎訳『ケアの倫理と共感』勁草書房 2021

M. ガブリエル『倫理資本主義の時代』早川書房 2024

片岡徳雄『子どもの感性を育てる』黎明書房 1990

森田正馬『新版 神経質の本体と療法』白揚社 2004

梶田毅『「いのち」の教育のために』金子書房 2018

西野真由美・押谷由夫・貝塚茂樹・渡辺弥生『道徳教育の理論と実践』放送大学振興会 2020

鈴木中人・玉置崇『「いのちの授業」をつくる』ちくま出版 2022

【特集】

「きょうよう」と「きょういく」と —「江戸川総合人生大学」での20年—

はじめに

「江戸川総合人生大学（以下、人生大学）」は、私が住む東京都江戸川区が運営している、区民の学びの場です。単発の文化講座のようなものではなく、地域デザイン学部の江戸川まちづくり学科・国際「ミニ」ティ学科、人生科学部の子育てさえあいい学科・介護健康学科という2学部4学科から成り、修業年限2年間で、「共通基礎科目」と「専門科目」を学びます。2年次には「社会体験活動」や「課題研究」も行われます。各学科の定員は25名（全体で100人）で、学生は20歳代から80歳代、平均年齢は60歳代です（学校教育法上の大学ではありません）。

人生大学は、「共育と協働」「ボランティア立区」を掲げた多田正見・前江戸川区長の発案によるもので、学長に北野大氏を迎え、地域を支える活動ができる区民の育成という理念を掲げて、2004年10月に開かれました。

私は、設立当初から、子育てさえあいい学科（当初は「子どもコース」という名前でした）の講師としてずっと関わってきました。最初のきっかけは、大学の「設立準備委員会」に「区民委員」として加わっていた高

橋三千世さんという漫画家の娘さん

と、私の息子が小学校の同級生で、2004年5月の運動会の時に「秋から総合人生大学というものが始まるにあたって講師を探している」という話を聞いたことでした。

それ以来20年、人生大学は私自身の社会参加の場として意味のあるものになっていくと同時に、その中でいろいろなことを考えることができました。ここではその一端に触れたいと思います。

1 「出会う」と「学ぶ」
学生にとって人生大学の最大の意味は、「出会い」と「学び合い」だと、私は考えています。入学動機は様々ですが、特に男性に多いのが「退職をしてこれから何をしようかと考えていた時に、たまたま大学のことを知った。これまでは家と会社との往復だけであったが、これからは地域での活動をしたい」というものです。そして卒業の時に多く聞かれるのは「多くの仲間ができて良かった。この歳になって新しい友だちができるとは思わなかった」という声です。

北野学長は人生大学を、広瀬淡窓の咸宜園になぞらえます。様々な経験を持つ人が、立場や年齢の違いを

越えて集う場ということです。そこに新たな「出会い」があります。もちろん、講師や事務局担当者との出会いもあります。

そして授業だけでなく、大学の運営への参加、情報紙の発行、大学祭の開催などを通しての「学び合い」や協働があります。学生が多様なだけに、様々な考えや意見が出されることとなります。私が担当する授業では、グループでの意見交換を中心にしますが、本当にいろいろな意見が出され、こちらが学ぶことも数多くあります。北野学長は、「多様性」が人生大学の強みだと言われます。

同じ区民であっても、日常の生活の場ではおそらく出会うこともなかった人と知り合い、ともに学び合う体験は、卒業後の活動にもつながります。

2 多様であることの難しさ

ただ多様であることは、互いの違いが大きいうちでもあるため、相互理解や協働が難しくなるという問題があります。ただそれも学びの材料になります。コミュニケーション能力というと、自分の思うことを的確に伝えるという発信が強調されますが、それと同時に、相手の言いたいことや気持ちをできるだけ正しく受

験を持つ人が、立場や年齢の違いを

け取ることも重要です。また他者のことをすべて「理解」することはそもそも無理であるため、「分からない」ことを自覚して、その上で互いの存在を認めていくことも必要になります。

また多様であることは、知識や体験や問題関心のあり方が異なるということにもなります。学歴も様々であつて、資料を読み取る力なども違います。

子育てでさえあい学科の授業はオムニバス形式で、ほぼ毎回講師が変わります。その中で私は現在、「生きる力を育む」学校教育の視点から「幼児期の教育を考える」「いじめ問題を考える」「アイデンティティを育む」学校教育の視点から「

といったテーマの授業を担当しています。学生は15名程度の場合が多いですが、どれも適当な資料を探すのに苦労します。主に学校教育に関する内容であるため、文部科学省の文書や発達心理学の教科書などを使ったこともありますが、あまり反応が良くありませんでした。

結局のところ、「一方的に知識を与える」方式では意味がないと分かりました。これは一般の学校でも同じですが、学生が多様な人生大学では特にあてはまります。むしろ多様性を

活かすことを考え、学生同士の意見交換と発表を中心とするようにしました。「生きる力」や「アイデンティティ」というよく分からない(?)言葉も、私が説明するのではなく、学生自身にその意味を考えてもらいます。もちろん学生に丸投げではなく、

これらのテーマを考える理由(なぜ今議論されるのか)や、「いじめ」や「幼児教育」にどういった問題があるのかといったことは前置きとして伝えま

す。いずれにしても「正解」があるものではないので、自分(たち)なりに、少しでも考えの広がりや深まりが見られることを期待しています。

3 学ぶことの難しさ

もう一つ人生大学で感じる難しさは、経験(あるいは年齢)が学びを妨げる場合もあるということです。学生が学ぶことに強い思いと意欲を持っていることは間違いありません。ただ一定の経験と、それに基づく自分の考えができあがっていると、新しいものを受け入れたり、自分の考えを変えたりすることが難しくなるのは事実です。

子育てでさえあい学科は文字通り、子育てと子育て支援のあり方を考え、何らかの形で実践につなげていくこと

を目的としています。しかし、子育てはどうしても自分の体験(育てられた体験と育てた体験)を基に考えがちであるため、一定以上の年齢の人にとっては、「子育て支援」という比較的新しい考え方がなかなか受け入れられないという面があります。

あるいは「子育て支援は、若い親(主に母親)に子育ての方法を教えること」と思っている人もいます。そのよ

うな人に「子育ては親だけの仕事ではない」「子育て支援は何よりも親の話を聞くこと」と伝えても、なかなか納得してもらえません。また教育や子育ての世界には、様々な「紋切り型言説」があります。例えば「昔は三世代の大家族

だったため、子育てに関わる人が多く、いろいろな知恵が伝えられた」「昔は親のしつけが厳しかった」「昔は地域の中で子どもが成長した」などです。「昔」とはいつのことかはつきりしないことは描くとしても、本当にそうだったのか、あるいはそれが良いことだったのかについては現に議論があります。「三世代家族の中で『嫁』の立場は弱く、周りから干渉されて自分の思う子育てはできなかった」「親

によるしつけが意識されるようになったのは、むしろ最近のこと」「地域に

は様々な人間がいて、悪い影響を受けけることもあった」といったことを併せて考えてみるのが大切でしょう。そのことで懐古主義や「今の若い人は……」的発想から脱して、今後の方向を見出すことが可能になります。

学ぶとは、自分の考えを振り返り、体験を相対化することで、新しい(より広くて深い)認識に達することだと言えます。そのためには柔軟

に考え、自分を変えていく姿勢が重要です。この点では若い大学生の方が優れているかもしれませんが、経験と年齢を重ねても、そのようであり続けるために何が必要かを(自戒を込めて)考えたいと思います。

4 学ぶことの意味

さて人生大学は、高齢者の学びの場という性格も持っています。北野学長は、高齢者の人生に必要なものとして「適度な運動」「適切な食事」に加えて「生きがい」を挙げています。そしてこの「生きがい」は「誰かに必要とされている感覚」だと言われます。人生大学の学びや卒業後の活動は、この「生きがい」となるも

のです。ここで登場するのが「きょう」と「きょうつく」です。つまり「今日、用がある」「今日、行くこと

るがある」と言えることです。

「何のために学ぶのか」「学ぶ意味は何か」については様々な答えがあります。それは学習者の立場や目的によつて異なります。高齢者の学びと若いことを考えれば、職業準備や経済的必要によるという側面よりも、そここそ教養や生きがいのためといったことが前面に出てくるかもしれません。自分自身の人生を豊かにするため、自分が誰かの役に立つための学びです。

ところで、2024年10月に人生大学の創立20周年記念式が開かれました。その時の来賓として多田前区

長が臨席されましたが、挨拶の中で、設立時の考えとして「人生大学を資格を取る場にはしない」と言われていたのが印象的でした。この立場は現在も引き継がれています。2024年3月の江戸川区議会である議員から、人生大学の学びが仕事につながるように、ICTや語学関係の資格取得ができるようにできないかという質問がありました。それに対しての区への回答は「資格取得のため

念のつとって運営していく」という

ものでした。質問の趣旨は、人生大学をより積極的に活用したいという立場からのものでしたが、区の姿勢はそれとは一線を画するものです。

一般的に学校は、個人から見れば将来の人生への準備段階であり、社会から見れば次世代の担い手の育成のためのものです。そのために、必要な知識・技能を身につけたり、学歴を含めた資格を取得したりします。これは「学問は身を立つるの財本」(「学制序文」1872年)以来の学習観です。

学校での学びがそのようなものであることは否定できない事実で、大きな意義があります。ただ学ぶことには、それ以外の側面もあります。例えば、学ぶこと自体を楽しむ、知ること自体に喜びを感じるということがあります。また他者と協働の中で学び、相互理解を深めるという場面もあります。このようなことは学校で実現することは難しいかもしれませんが、学校だけが学びの場であるわけではありません。

びは学校だけで行うものではありません。学校の外に、様々な形の学習の場があることが大切です。人生大学はそのような場の一つです。ここで述べたような難しさはありますが、自発的に参加し、地域の課題を見出し、何らかの行動をするために学びは、個人にとつても自治体にとつても意味があります(人生大学の理念は、東井義雄の『村を育てる学力』と重なるように思えます)。これから



(前列右から二人目より、友野、藤澤区議会議員、多田区長、北野学長、笹井学科長)



教師に「その瞬間」は

突然訪れる……

初めての教員生活は非常勤講師。

授業を行うことで精一杯。経済学部出身なので日本史の知識は些少。専任教員でなくて本当に良かったと思う日々でした。

2年後に私立の女子校の専任教諭に。授業以外にも仕事はたくさんあるのですね(当たり前です!)。学級経営、旅行や校外学習の引率、部活動、校務書類作成、放送委員会、入試問題の作成、運動会の放送担当や文化祭の舞台進行の責任者など、わからないことだらけです。時にはトラブル対応も。まず目の前のことを、他の先生に遅れないように迷惑をかけるないようにこなすのがやっとでした。校外に出る前には、計画・業者との打ち合わせ・下見と並行して旅行委員の指導があり、行事の前にはリハや打ち合わせが……。当日まで長い道のりだということを知りま

した。

専門である公民的分野の内容に関しては、政治や法律、国際関係分野は相変わらず謎の多い日々でしたが、大学で学んできた経済分野については、「どうしてこんな内容や順序なのだろう。もっといい教え方があるの……」と思う程度の余裕は出てきました。

「ここまではまだ、「守破離」の中で「真似る」「何とかこなす」状況ですよ!!!」

すね。しかしそんな私にも、ある日その瞬間が来ました。

「『労働と余暇』でいかがでしょうか?」「いいですねえ」教科書の編集会議で新しい単元のタイトル決めの際、アイデアを出す際に、誰かが出したこの案があつさり了承された時がそれでした。

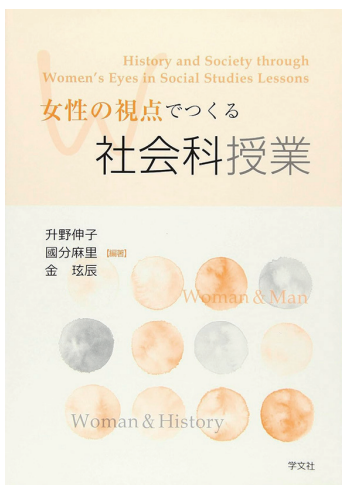
「えーっ? 労働と対になる言葉は余暇なんですか? 私は違いますよ!!!」

第一子を産んで復職したばかりの私にとって。労働(教員としての自分)と対になるものは余暇ではありませんでした。早く帰って子どもを迎えに行つて、食事の支度やら風呂に入

れたり明日の保育所の準備をしたり……。夜は一緒に布団に入つて昔話をしていっうちに私の方が寝てしまつた。昔話はいつも途中で終わつてしまつた。まうそうです(本人は眠ってしまったので認識していませんが苦情がきました)。

「こんな生活をしている私にあてはまらない説明は、普遍的なものじゃない。普遍性がないなら科学じゃない。そんな説明がまかり通る経済学って何なのよ!」という発見です。

でもまだ発見したばかり、気づいたばかりで、どう解きほぐしていけばいいのかよくわかりません。それでも自分の中で学びの「軸」となるもの



「女性の視点でつくる 社会科授業」
学文社 2018



を見つけることができた瞬間でした。教員になって10年くらいの時のことです。その思いが、「社会科学とジェン

ダー」という領域へ誘ってくれて、今の自分があるのだと思っています。謎があれば向かっていくエネルギーとなりますし、物事を所与のものとして受けとらない習性も身につきました。30年近く前のことなのに、(もの忘れとも探しが散発する現在でも)少しも消えることがない光景です。

「ここまで、教科についてですが、突然の瞬間は油断していると不意に襲ってきます。 昼下がりに「新婚さんいらっしゃい」をぼーっと見ていた時、出てきた新婚さんの妻がすべて高校卒業後すぐ結婚して専業主婦になっていました。ふと「この子たちにとって学校教育の意味って何だろう?」 微分積分を学ぶことが何の意味を持つのだろう?」と不遜なことを考えてしまいました。もう少し深く掘り下げてみたらそれは自分に対しても同じ問いかけなのですが……。大学進学を取り去った時の学びの意味について、大学進学が当たり前の境遇で過ごし働いていた自分は思いを馳せることができなかつたことに気づきました。今は少しは自分なりの答えを持ち合わせていますけどね。新婚さん恐るべし。安穩とした昼下がりが突然豹変しました。

子どもが保育所に行くようになって、長男の1歳の誕生会がありました。誕生会は保護者も参観できません。保育所では月に全員が集まる誕生会があつて、順繰りに園児が主役になっていきます。息子も金色の(折紙の)冠をかぶせてもらい、先生方やお友達から「おめでとう」と言われていました。その時に、「ああ、この子を育てているのは私だけではない。皆さんなんだ……。皆が関わってくれているんだ……。ということに気づきました。小学校のマラソン大会では、息子に対して「升野くん頑張れ」と応援してくれた女の子のママがいました。誰もが自分の子どもを応援するであろうマラソン大会で、他人の子どもに声をかけてくれることに驚

きました(よく考えたら順位は男女別なので長男の順位は女の子とは関係ないのですが……。でも、その時に他人の子どもを応援する保護者がいるような学級にしたい、子を思う保護者どうしが互いに豊かに関わっていきけるクラスを自分も作っていきたくて強く思いました。子どもを持つ前は、保護者会は少し気が重い時間でしたが、子どもを持つからは担任として楽しいイベントとなりました。保護者どうしが子どものことについて話せる場を提供できること、自分が見ている生徒の姿を保護者と共有して話ができること、時に生徒について共感したり考えたりすることは、教員ならではのものです。思春期になると、子どもの家庭での語彙力は急減し、極端な子は「ふつ」「さあ」「大丈夫」程度しか話さなくなりま

す。そんな子たちが、保護者の前では絶対見せないであろうキラキラした姿を一等地で見ることができ自分の仕事を、ついつい自慢しなくなってしまう。 このように考えると、教員という仕事は、日常の何気ない瞬間が仕事への示唆とエネルギーを与えてくれるものだなあと強く感じます。 一方で、本当に打ちのめされる

「大丈夫」程度しか話さなくなりまして。そんな子たちが、保護者の前では絶対見せないであろうキラキラした姿を一等地で見ることができ自分の仕事を、ついつい自慢しなくなってしまう。

「その瞬間」を意味のあるものにするべく、準備をしていきたいと思っています。

「その瞬間」を意味のあるものにするべく、準備をしていきたいと思っています。

「その瞬間」を意味のあるものにするべく、準備をしていきたいと思っています。

「その瞬間」を意味のあるものにするべく、準備をしていきたいと思っています。

「その瞬間」を意味のあるものにするべく、準備をしていきたいと思っています。



教育的愛情が

生徒指導の基盤を作る

私は令和6年度に本学に着任し、

「生徒指導・進路指導」、「教育相談」、「特別支援教育」、「教育心理学」など、教育に関する科目を担当しています。今日は、生徒指導という領域において、私が大切だと感じているポイントについてお話ししたいと思います。教師という職業は、単に知識を伝えるだけではありません。生徒一人ひとりの成長を多角的に支える、奥深い役割を担っています。

生徒指導提要には、生徒指導の基盤となる人間関係を形成するために意識すべき9つの基本的な事項（表1）が掲げられています。それらは、

生徒が心身ともに健やかに成長するための羅針盤のような位置づけとなり、非常に重要であると考えています。これらが達成されることによって、生徒指導において重要な教師と生徒との信頼関係が醸成されていき

表1 生徒指導の基盤となる人間関係の要点

- ① 安心して生活できる
- ② 個性を発揮できる
- ③ 自己決定の機会を持つ
- ④ 集団に貢献できる役割を持つ
- ⑤ 達成感・成就感を持つことができる
- ⑥ 集団での存在感を実感できる
- ⑦ 他の児童生徒と好ましい人間関係を築ける
- ⑧ 自己肯定感・自己有用感を培うことができる
- ⑨ 自己実現の喜びを味わうことができる

（生徒指導提要改訂版より抜粋）

切にされている」、「自分が守られている」と感じられることです。

生徒を大事にすること

では、どうすれば生徒にそのような感じてもらえるのでしょうか。その方法について、一緒に考えていければと思います。第一に、一人ひとりの生徒に合わせた指導が重要であると考えています。生徒それぞれの個性や背景に応じて、きめ細かく指導を行うことが、生徒の自己肯定感を育むことに繋がります。たとえば、歴史に苦手意識を持っている生徒には、歴史ドラマやドキュメンタリー映像を用いて視覚的に学べる機会を提供することが有効かもしれません。また、歴史的な人物になりきって当時の状況を体験するロールプレイングゲームを取り入れることで、より深く歴史への興味を引き出すことが可能です。

ます。こうした9つの事項を達成しようとする教師の日々の努力や想いこそが、教育における「教育的愛情」にほかならないと私は考えています。

生徒指導の目指すべきゴールは、生徒一人ひとりの個性を尊重し、その個性を活かして社会的な資質を育

むこと、そして自己実現を支えることとです。生徒が自分らしさを発揮するために、安全で安心できる環境が不可欠です。マズローの欲求階層

理論（図1）においても、生理的欲求の次に安全への欲求があります。最も大切なのは、生徒が「自分は

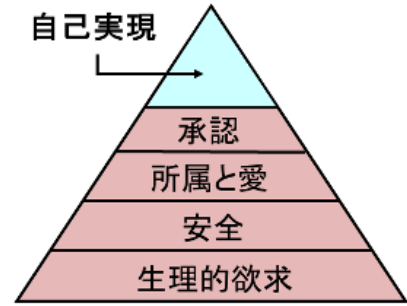


図1 マスローの欲求階層説

場を作ることが、学びを深めるための大きな手助けとなります。

また、教師が丁寧な言葉遣いをすることも重要だと考えています。教師の言葉は、生徒の心に大きな影響を与えます。生徒指導提要でも不適切な指導という表現で、教師の言葉遣いや言動について注意がなされています。否定的な言葉ではなく、共感を示し、励ます言葉をかけることで、生徒のやる気を引き出すことができます。「できない」と言うのではなく、「もう少しでできるよ」や「一緒に考えてみよう」といった言葉をかけることで、生徒の自信を損なわず、学習意欲を高めることができます。教師として、言葉遣いには特に気を配り、過度の叱責を避け、適切なタイミングで褒めることが大切です。生徒一人ひとりの個性や能力を認め、尊重することで、自己肯定感を高めることができます。教師の言葉がけによりクラス全体が温かな雰囲気になります。包まれていれば、生徒が学習に集中できる環境が整うのです。

教師も大事にされるべき存在である

大切なことは、生徒と教師が一体であるという意識を持つことです。生徒が「大切にされている」と感じる

ためには、教師自身も「自分は大切にされている」と感じる必要があります。

教師が周囲から大切にされ、サポートされると感じられる環境が整うことができます。例えば、生徒もその安心感を感じることができるよう、教育的愛情を注ぐためには、教師自身が「心の余裕」を持つことが求められます。多忙な日々の中で、生徒一人ひとりに目を向け、適切な指導を行うのは容易ではありません。だからこそ、教師の業務を軽減し、心に余裕を持てる環境を整えることが必要です。また教員自身もセルフケアを意識するなど、自分自身を大切にすることを大切にする意識を持つことも重要です。

私自身も教職課程で教員養成に関わるなかで、教師になる可能性がある学生を大事にするということを教育実践の主軸としています。特別なことではなく、学生の顔と名前を覚えること、学生の努力や頑張りを認めること、学生の感想にコメントを返すこと、言葉遣いを丁寧にすること、学生が楽しいと感じられる授業を目指すことに日々取り組んでいます。

大学の学びの中で、「大事にされている感覚」を持った学生が教員になったり、その教員はきっと生徒のことも大事に扱ってくれるものと信じています。

お互いを大事にする環境を作ること

教師の役割は、知識を教えることにとどまらず、生徒の心を育み、社会で自立して生きていく力を培うことにあります。生徒が「自分が大切にされている」と感じられるような教育環境を作り出すためには、教師一人ひとりの意識改革とともに、教師に対する社会全体のサポートが欠かせません。そうしたサポートのもとで教育的愛情に基づいた質の高い教育を提供することで、生徒一人ひとりが自己実現を果たすことができます。その結果、誰もが豊かな人生を送ることができる共生社会の実現を目指すことができると考えています。

今回は、生徒指導の観点から、生徒が「大事にされている感覚を持つ」というテーマで書いてきましたが、皆さんは、中学校や高等学校で「自分を大切にしている感覚」を持てましたか？ 先生からどのように励まされたり言葉がけをもらっていましたか？ 過去の体験を振り返ることで、生徒指導について新たな気づきにつながるかもしれません。

苦手な教科に取り組む際には、小さな成功体験を積み重ねることで、自信を育てることも大切です。近年はインクルーシブ教育が強調されているように、発達障害等を持った生徒への個別的教育も重要視されています。

次に、クラス全体の雰囲気作りについて触れたいと思います。温かく、協力し合う雰囲気のクラスでは、生徒たちは安心して学びに取り組むことができます。そのためには、教師が主導するだけでなく、生徒同士が互いに協力し合うような活動を積極的に取り入れることが重要です。グループワークやディスカッションなどを通じて、生徒同士が意見を交換し、お互いを認め合うことができる



高校魅力化はどこに向かう？

1. 不確実な現代の確実な未来

変化が激しく不確実で予測が困難と言われる現代社会において、確実な未来があります。それは「人口減少」と「少子高齢化」です。日本は世界に先んじてこれらの課題に向き合わざるを得ない国であり、フロントランナーだと言えます。当然その影響は学校教育にも及び、とりわけ地方部では都市圏への流出という社会減と、それに伴う出生数の減少による自然減によって、学校の存続が困難になっている事例が後を絶ちません。

実は、こうした事態が生じることは、ずいぶん前から分かっており、予測されてきました。本稿の主対象である高校教育に関しても、平成2年をピークに生徒数は減少し続けており、1990年代から今に至るまで、各自治体はいわゆる再編整備計画を策定し実行し続けています。その基

本方策は「規模とコストの論理に基づく学校統廃合」です。しかし、その対応も限界を迎えつつあります。これ以上の統廃合は厳しくなってきたり、地域から高校がなくなることの影響も顕在化してきています。具

体的な危機が目の前に迫ってきたせいか、ようやく近年になって、高校教育のあり方をめぐる議論が国レベルでも急ピッチで進められるようになりました。正直なところ、後手にまわっていることは否めません。とはいえ、避けては通れない問題です。

2. 高卒当然社会の到来

紙幅の都合上、詳細は省きますが、高等学校への進学率は1960年代に急上昇し、1970年代には90%を超えるようになりました。この時期、公立と私立が（地域によって程度差はあれ）協調しながら受け

皿を用意し、高校教育の量的拡大が図られました。その背景には高度経済成長下での人材需要があったわけですが、大半の生徒が高校へ進学することになった結果、かつては「行けば得する」高校は、行くことが当たり前で「行かなければ損する」高校へと変容していきました。すなわち、「高卒当然社会」（香川ほか、2014）の到来です。実際に現代日本において高卒の学歴をもっていないと社会的に排除されるリスクが明らかに高くなる実態があります。

他方で、量的拡大が達成されると、当然ながら進学してくる生徒の学力はもろろんのこと、興味関心、キャリア意識なども幅広く、多様になります。その多岐にわたるニーズに因應するために、新しいタイプの学校（例：中高一貫校、単位制高校）や学科（例：総合学科）が制度化さ

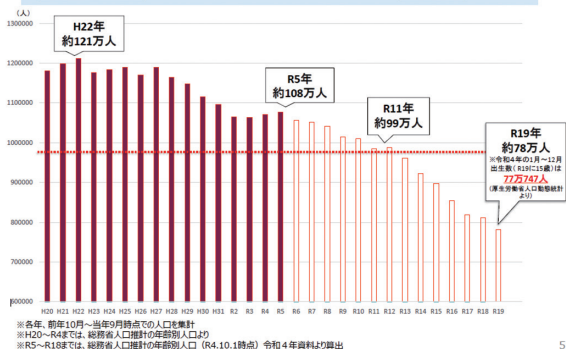
れ、類型やコースなども次々と設けられるようになりました。臨時教育審議会以降、この多様化が基本路線であり、近年の改革ワード「高校魅力化」はその延長線上にあるものと言えます。もちろん、高校教育を魅了し、生徒一人ひとりの多様なニーズに応えることは重要です。しかし、15歳人口が減少し続ける縮小フェーズにおいて、「多様化・魅力化」路線を強く推し進めることのリスクにも注目する必要があると私は考えます。

3. 高校魅力化の危うさ

看過できない現実の一つに、魅力化という名のもとで繰り広げられる学校間の「生き残りかけた競争」が挙げられます。各学校は、魅力を打ち出すことで、選んでもらえる学校になる必要に迫られています。ここが義務教育とは大きく異なる点

15歳人口の推移

○15歳人口は、年々減少傾向。これまでは100万人を超えて推移してきたが、令和11年には100万人を割り込み、令和19年には約78万人になることがほぼ確実。令和19年の人口は令和5年と比較して約28%と減少する見込み。



文部科学省 (2024) 「第13回高等学校教育の在り方ワーキンググループ参考資料4」より転載

です。実際に公立同士、公私間での生徒の奪い合いは起きています。ですが、公立高校の教員の場合、その学校がたとえ廃校になったとしても、他の高校に異動すればいいわけです。もちろん、当事者意識をもって魅力化を推進する教員もいますが、数年経てば異動することは避けられず、また、魅力化して生徒数が回復してきても、統廃合の憂き目にあう場合すらあるわけです。

公立高校において、魅力化を進めるインセンティブが十分に働かない可能性があるなか、私立学校や広域通信制学校のプレゼンスが高まりをみせるほど、公教育の主な担い手である公立高校は弱体化、後退化していく恐れがあります。そもそも公立には魅力化のための予算すら十分にありません。教育の中身だけでなく、学校の立地や地域特性、ICTを含むアクセスの利便性、財力など、有利な環境や条件の学校はますます有利になり、不利な学校はますます不利になる、いわゆるマタイ効果のようなものを想定すれば、地域間格差や学校間格差は拡大し、家庭の経済格差による影響も強まり、高校教育の機能不全を引き起こしかねません。

ちなみに、魅力化の中身に目を向けてみると、日本の高校は偏差値で輪切りにされているせいもあってか、偏差値帯によって、打ち出される魅力の傾向が異なることが分かります。居住地から通える範囲にどのような高校があるのかによって、生徒は不利益を被ることになります。他方で、カリキュラムに注目すれば、わずか週2〜3コマの授業実施、または、年数回のイベント的な教育活動の実施などでもって魅力を出しているケースがかなり多いことに気づきます。これで果たして「魅力」と言えるのでしょうか。

4. 高校教育の成功定義は何か？

最後に課題提起をしておきます。今、求められるのは、いかに高校教育を賢く縮めながら充実させるか、すなわち、「縮充化」路線への転換です。そのためには、多様性ではなく、むしろ、共通性に目を向ける必要があります。なぜか共通性に関する議論は一向に深まっていません。高校教育もまた今や社会的共通資本の一つであり、何をもちて高校教育は成功したと評価・判断するのか、その定義を定め、本当に達成すべき最低基準を明確にする必要があります。これは高卒という学歴が何を修得したことを証明するのかにかかり、生徒たちの学習権保障にかかります。

現行の学習指導要領は大綱的基準でありながらも、最低基準性を有するとされていますが、私は決して最低基準とは思えません。明らかに注文が多すぎます。フルスペックであることを手放し、もっとミニマムで、コンパクト、かつ、シンプルな構造と内容にすることが必須です。現状でも、高校卒業程度認定試験は行われているわけであり、その試験をクリアすれば、高卒者と同等以上の学力が認められるわけですから、それとの整合性も図る必要があるでしょう。

あわせて、かつての「高校三原則」(学区制、総合制、男女共学)に立ち返り、その価値を現代的に再考する必要があるのではないかと考えます(カリキュラムに関して言えば、当時、大教科制も提案されていました)。

各自自治体・学校もまた、「縮充」というコンセプトのもと、各高校が学校単位で魅力化を図り、生徒を「奪いあう」競争モデルではなく、地域(あるいは学区)単位でリソース等(あるいは学区)単位でリソース等を「共有する」共存モデルへの転換をどのように図っていくかを大胆に模索していくべきでしょう。カリキュラムはもちろん、教員配置も含めて、この先、一つの高校内ですべて完結させることは現実的ではありません。上記の意味での最低基準を満たしながら(自治体で独自に設定することも可)、地域設定教科を置くなどして、地域(あるいは学区)内の学校間が連携し、独自性のある魅力的な学びの実現に向けて邁進できる体制をつくれるかが鍵を握る、私はそう予感しています。

【参考文献】

香川めい・児玉英靖・相澤真一 (2014) 『高卒(当然社会)の戦後史』、新曜社

教育の最新事情

型とその伝承、そして教育(二) 「守破離」と踊り場の効用

1. 「守破離」という概念

全てに備えようとするれば、全てが手薄になることを、我々は経験的に知っています。筆者は、長年慣れ親

しんだ古流武術(居合剣術)の経験を踏まえ、身体に繰り返し練り込んだ「型」が、備えようのない事々に向き合う術としての「実践知」を育むという視座を紹介しました(薬袋2024)。人の身体(五体)は、思弁の器であると同時に、あらゆる所作の制約条件となります。不測の事態には、状況に応じて自在に対応する必要があり、生得的制約下で、幾通りにも変化する可能性に開かれた身体を培う知恵は、懸待を系統化した型と、その伝承過程において獲得される型の「運用」の中にあるのです。この型を起点とした修業者の行動様式や、型との付き合い方を示す概念に、「守破離(しゅ・は・り)」があります。

「守破離」は、一般に、剣道や茶道などでの修業における段階を示したものの(初出は茶道と謂われます)で、「守」は、師や流派の教え、型、技を忠実に守り、確実に身につける段階、「破」は、他の師や流派の教えについても考え、良いものを取り入れ心技を発展させる段階、「離」は、

一つの流派から離れ、独自の新しいものを生み出し確立させる段階をさす(『大辞泉』)と理解されています。

2. 「守破離」とビジネス

筆者の専門領域であるビジネスでも、こうした「守破離」の解釈を用いて、基礎となる技術や原理を深く理解することが、革新的アイデアを生み出すための土台となること、さらに、既存概念に捉われず、基礎となる技術や原理を如何に活用できるかの新たな可能性を絶えず模索することの重要性を説くといった教育的言説が見られます。

例えば、トヨタ自動車は、①米国フォードの生産方式(科学的管理法)に学び、その本質を深く理解し、②フォード方式の課題を洗い出し、改善を加えることで自らの生産方式を確立しました。そして、③かんばん方式、多能工化といった独自の革新的生産手法を導入し、トヨタ生産方式による世界最高水準の生産効率を実現し、その手法は他業界にも多大な影響を与えました。このエピソードは、自社が積み上げてきた成功事例や教訓、知識、技術、ノウハウを徹底的に学び、有効とされる既存フレームワークが有する

打ち手を深く理解した上で、只管に模倣を試みる「①守」から、常識や過去の成功体験に捉われず、新たな視点から課題を捉え直し、常に変化する市場環境に適応したアイデアを提案することで既存の枠組みから脱却する「②破」を経て、最後に、こ

れらの経験を基に創造性を発揮し、独創的で全く新しい価値を生み出す「③離」に至るといふイノベーションの発展段階を示しています。そして、この言説は、「守破離」に仮託した寓言として、人や組織の不断の成長を鼓舞する文脈で展開されるのです。

3. 「守破離」言説をめぐる違和感

人であれ組織であれ、競争的環境においては、新たに識別された標的採用者のニーズに、より適応できる新機軸の創造が常に要求されます。競合からの挑戦に晒される中で、急進的革新(Radical Innovation)による瞬息万变に心惹かれるかもしれませんが、独創的アイデアが必ずしも成功をもたらすとは限りません。古流武術の徒弟制は、個人的知識を育む営みとして、他流儀からの介入を忌諱しつつ継承されてきました。「守破離」の含意は、自らの体系の基本を丁寧にはきかえてこそ、イノベー

タイプな試みが可能となる点にあり、時に成長が停滞する踊り場の存在をも厭わない漸進的革新 (Incremental Innovation) に信を置いていきます。

ですから、革新の主たる源泉を、外在する知識体系との安易な混合に求めたり、自らの体系の保守ではなく訣別を成功とし、到達点と位置づけたりする見方には、違和感を覚えま

す。 どうやら、この違和感の正体は、「守破離」をめぐる二通りの解釈、即ち「型を守り、型を破り、型から離れる」と考えるか、「型を守り、型を破り、型を離れる」と考えるかの

微妙ともいえる違いに起因するのではないのでしょうか。前者は「型」という中心点を廻る系からの離脱を志向する態度であり、後者は「型」という中心点を廻る系を維持しつつも、中心点との関わり方の再構築を志向する態度であるといえるであろう。「離」の扱いは難物なのです。

前者の見方として、藤原 (1993) は、禅、能楽、茶の湯、武術といった伝統芸能に纏わる言説を広く渉猟した上で、「守破離」を「覚性に至る修業者の行動様式を示す心性の道筋」であると位置付けましたが、一方で、その概念は、良くも悪しくも

覚性得悟に至る三つの段階に粗挽きしたものに過ぎないとしています。確かに、「守」のみは、流儀毎に、やや

精緻な体系を有してはいるものの、第二段階の「破」は、自覚得心が示唆されるだけのことで、明確な教程の如きものは存在しません。さらに第三段階の「離」に至っては、千変万化する白雲の流れにも似て、形も色も音も匂いもなく、その境地を確認

できるのは、「離」の領域に達した名人だけ (例えば、剣術家・針力谷夕雲や山岡鉄舟が大悟した勝負すらも争わぬ境地) だと、半ば嘆息気味に指摘しています。

一方、後者の見方は、稽古の日常と共にあります。修業者は、師から外生的に与えられた「押しつけ」ともいえる型の手続きを口管に墨守し、型の中に身体を入れて技を錬成し、次第に上手となりますが、それは自己をその型の中に留め置くことと同義です (西平 2009)。そこで、型

を破る、即ち型を拒否する融通さを獲得するための葛藤が始まる訳ですが、「破」は、「守」の長い踊り場の営みに生じる一瞬の光芒であり、この出来事を経験できるか否かが、修業者として篩にかけられるところではないかと思えます。

4. 踊り場の効用: 「破」の準備と「離」の準備

では、「守」から「破」を生む準備として何が必要なのでしょう。か。

筆者は、修業者が、型を伝承し演じる自身の姿を、鏡 (或いは影) の中に見つめることから始まると考えています。それは、一分の隙なく型を再現する自身の姿を追い求めるという、長きに亘る営みから脱して、いつし

か、創始者がなぜそのように型を編んだのかに思いを致し、彼の思考を、鏡に映る後世の伝承者自身が追体験する営みに転じた時にその準備が整うということなのです。つまり、「破」

とは、伝承者の思考と創始者の思考との邂逅であり、伝承者がイノベーターとしての当事者意識を獲得することをさすといえるでしょう。そして創始者の思考との邂逅は、修業の過程で拡散し情報展開された数多の思念を縮約 (薬袋 2024) する契機をもたらし、これによって修業者は、型を離れる準備を整えるため

の新たな踊り場に入ります。西平 (2019) は、「離」を、型を放棄するのではなく、使うこともできれば使わないこともできる、その時その場に依じて、その都度自在である状態と位置付けます。型と自身との関係を

再構築し、創始者からの借り物としての型から自身を取り戻した自由な術者として、あらためて演じる型には、新鮮な味わいが宿るはず

です。 学校教育の現場であれ企業研修の OJT であれ、指導者側が、学習者側の創造性を養うことを目的に、初手から「自由に発想せよ」、「現場に

適応せよ」と投げかけるのは、学習者側に基盤となる型が身に付いていない限り悪手となります。型との付き合い方の作法である「守破離」は、革新の揺籃たる踊り場で葛藤し、猶も漸進する一身独立の物語であり、我々は、教育における「踊り場の効用」を積極的に評価すべきなのです。

【参考文献】

薬袋貴久 (2024) 「型とその伝承、そして教育〜実践知の体得をめぐる〜」『昭和女子大学教職課程研究報』 Vol. 8, pp. 15-17.

西平直 (2019) 『稽古の思想』、春秋社。

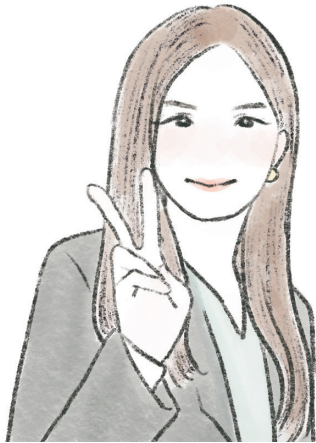
西平直 (2009) 『世阿弥の稽古哲学』、東京大学出版会。

藤原稜三 (1993) 『守破離の思想』、ベースボールマガジン社。

綿谷雪 (1982) 『考証武者列伝』、三樹書房。

先輩はもかく、されど進む

昭和女子大学を卒業後、教育に関わるお仕事で活躍している先輩方から近況報告やメッセージをいただきました。もがきながら、苦しみながら、それでも前に進む頼もしい先輩たちのリアルな言葉をお届けします。



小学校（公立）

佐藤 衣歩希先生

初等教育学科 卒業

「やっと終わった」私が教員になって最初の1カ月が終わった時に思ったことです。

採用試験に合格してから着任するまでの間は、不安や緊張もありましたが、ワクワクや楽しみな気持ちもありました。しかし、なりたいと思ってなった教員ですが、想像していたよりも目まぐるしく毎日が過ぎる中で楽しいと思える時間はほんのわずかしかなかった。そして、1年目が終わり振り返ってみた時に、「着任する前の想像とのギャップに大変だと感じることも多かったけど、終わってみれば楽しかったし、面白い一年だったな。」と感じました。また、2年目の半分以上が過ぎた今、目まぐるしい日々が変わりはないですが、教員の仕事の面白さや楽しさを感じられる瞬間が多くなってきました。

2年目の私が皆さんにアドバイスできることはあまりありませんが、「何事も失敗を恐れないで取り組む」ということを身に付けてほしいと思います。「1年目の時は、たくさん失敗した方が良い」「これから同じ失敗しなければ大丈夫」などということがたくさん先輩方に言っていただきました。私は、これまでたくさん失敗もしましたが、先輩方や子どもたちのおかげで日々成長し、楽しく過ごすことができています。

たすけてくれる人がたくさんいますので、教員を目指そうとしている皆さんは、安心して勉強してください。応援しています。



高校（公立）地理歴史科

八木 紀子 先生

歴史文化学科 卒業

教員として日々を過ごす中で、私が楽しいと感じることの1つは、生徒の反応を見ながら授業を展開することです。特に歴史史料を用いる時、生徒たちの予想外の反応にいつも驚かされます。生徒から新しい視点が得られ、生徒と共に学びを深めている実感があります。

また、予想外だったのは、生徒たちが現代社会の問題に関心を持っていることです。SNSの普及には否定的な印象がありましたが、情報に触れる機会が増えたことは事実です。しかし、情報の多さに振り回される生徒もいます。そのため、教員として基礎的な知識を与え、物事を多角的に見る力を育むことが重要だと感じています。

一方で苦しいことは、専門外の歴史総合の授業づくりです。世界史分野には苦戦しますが、生徒の興味を引き出すために工夫することは、苦しさと同時にやりがいがあります。

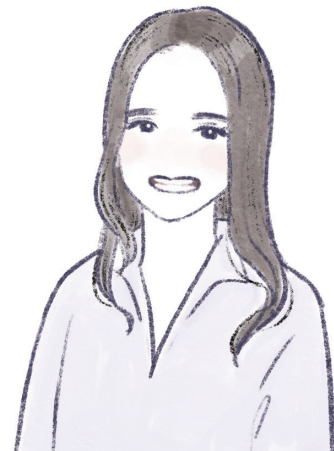
忙しい日々ですが、その忙しささえ楽しんでいる自分がいます。生徒と共に成長し続けられる教員という仕事を、これからも大切にしていきたいです。

「教員はブラック」この言葉をよく耳にします。私も最初は不安でした。しかし、実際に教員になって思うことは、「教員になってよかった」です。

私は現在、埼玉県のある県立高校に勤務しています。大半の生徒たちが大学進学を目指し、日々授業や部活を頑張っています。授業もレベルの高いものが求められるため毎日、次の授業の準備をして、勉強をして、教壇に立った時の不安をなくそうと必死でした。もちろん最初は慣れないことばかりで、心も体も追いつかなかったです。

そんな日々でしたが、周りの先生方に助けてもらいながら少しずつ環境に慣れ、授業の中に自分なりのアレンジを出すことができるようになってきました。そのアレンジが生徒たちにとっても新鮮で、授業の内容を自分事として捉えることができるととても好評でした。以前より授業に真剣に向き合ってくれるようになり、とてもうれしかったです。

教員の仕事は多岐に渡り大変ではありますが、日々変化していく生徒たちの様子を見ることができるととてもやりがいを感じられる仕事だと思います。また生徒と一緒に自分も成長できます。教員の道を少しでも考えているならぜひチャレンジしてみてください！ 素敵な経験になると思います。



高校（公立）英語科

前原 綾音 先生

英語コミュニケーション学科 卒業

Pickup News

Showa Women's University Institute of Modern Education 2024



Core-PJ

三菱みらい育成財団賞 を受賞！

2024年9月28日
(土)に開催された、三菱みらい育成財団「みらい育成アワード2024」において、昭和女子大学現代教育研究所が電通「アクティブラーニング」などのどうだろう研究所」とタッグを組んでお届けしている「先生による、先生のための、先回り研修会」、略して先3（さきさん）が、三菱みらい育成財団賞を受賞しました！ 2023年度に採択されたカテゴリー5「主体的・協働的な学習（心のエンジンを駆動させる学習）を実践できる教員養成・指導者育成プログラム」のなかで、最も高く評価されました。未来を待ち伏せして、先回り先生たちと一緒に教育で先手を打てるように、私たちのチャレンジは続きます！ 先3への

想い・考え方やプログラム内容の詳細については次のWebサイトを是非ご覧ください。みなさんのご参加をお待ちしています。また、おかげさまで、教員研修や生徒向け講座のリクエストが続々と増えてきています。ご要望等ございましたら、昭和女子大学現代教育研究所までお問い合わせください。

*先3特設 web サイト

<https://saki3.swu.ac.jp/>

*三菱みらい育成財団 Web サイト

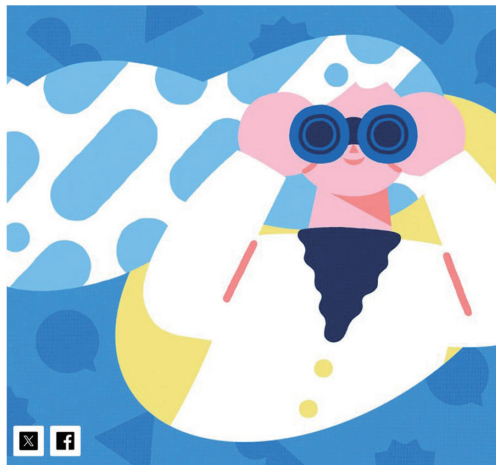
<https://www.mmfe.or.jp/partners/3147/>

先³で、教育界をもっとステキに！

「先3」今年のテーマは、守破離の「破」！豪華ゲストとともに「ゆるめる」「減らす」「発想する」「軸を作る」「調べる」「先回る」をキーワードに、最後は、参加者による「先回り研修アイデア」プレゼンショー。

先³

先生による
先生のための
先回り研修会



時間割	1	2	3	4	5	6
	ゆ	減	発	軸	調	先

その様子をおすそわけです。

1 限目は「ゆるめる」。コピライターの「ゆるスポーツ」考案者から弱さを起点に社会をかえるYURUIZATIONを学び、みんな「学校ゆる革命」アイデアづくりに挑戦。ガチガチ教科を選び、そのものの本質を見直し、なぜ排

除されているのか「ガチガチ要素」をリスト化し、本質を残したままガチガチをつぶす。一人ひとりの中にあるマイノリティ性にフォーカスした、新たなルールメイキングの大切さを学びます。

続く、2 限目は「減らす」。どうすれば、教師にスキマ・余白時間が生まれる？ そのヒントが「ほっとステーション」。保護者の要望・苦情に、多様な専門家が対応し、『こともまんなか』視点で見立てを行い、学校現場と情報を共有し対応を講じる「ほっとステーション」。その事例をもとに「学校の負担を減らす現場の取り組み」アイデアをシェアする中、私たちは気づきます、本当に大切なもの、必要なものはなに？ の視点で、学校現場を見つめることで、「減らせるもの」はたくさんありそうだ、と。

3 限目は「発想する」。ゲームクリエイターが大切

にするのは「遊びの種」。好きなこと、興味、おもいつき、気になること、楽しいこと、何気ない会話、それをたくさんゲットすること

がポイント。ありふれたものも、感じ方を変えるだけで、楽しいワクワクに変わっていく。それを実感させる思考遊具作家は「丁寧な逸脱」ワークを用意。思いがけない発想が自分の中から生まれワクワクの私たち。最後は「ミラクルワード」を使い「新しい修学旅行」を考案。私たちの発想力は爆上がりです。

4 限目は「軸をつくる」。「軸になるいい言葉って？」にクリエイターは答えます。「伝えたくてたまらない言葉」と。その軸へたどり着くプロセス、「調べる」↓「問う」↓「粘る」↓「出会う」↓「言葉にする」を具体的な事例をもとに学んだ私たちは「教育の軸づくりに挑戦。日々の生活の中で、自分の言いたいこと、

問いをもつことを大切にし、自身の思考のプロセスに意識的になろう！ そう思ってた私たち。

5 限目は「調べる」。様々な専門分野のプロのリサーチから学びます。豊かな情報量と切り取り方の違いで、多様なものの見方が可能になると。そのリサーチを駆り立てるのが「知的好奇心」。リサーチは「眠っているお宝さがし」だからこそ、沢山集め、地図は自分でつくる。そして、自分の心をコンパスにして、宝石じゃなく原石を探すために人と違う鉱山へ。「リサーチ」のエッセンスを学び取ります。

「リサーチをおもしろがる！」のマインドセットで、最終回6 限目は、自分が受けた先回り研修のアイデア発表会、さあ、どんなラインナップ？ いくつかは次年度の「先3」で実現予定。乞うご期待！

Project

探究につながる理科実験プログラムをみんなで考える

理科教育プロジェクトでは、新しい実験を考案するなどして、みんなで体験しながら子ども向けの探究プログラムを検討してきました。2024年度は、11の様々な実験について、学生や市民の方と交流しながら検討しました。主なテーマは次の通りです。

- ・チエレンジ編：パラシユートを空中に浮かす／スピルリナという微生物から光る色素をとりだす／静電気の「+と-」を考えて物を宙に浮かす

- ・科学工作編：ゴムでころがる紙コップの科学工作／水時計の科学工作／水と油の違いを利用した科学工作

- ・ロボット・プログラミング編：



ロボット「MakeX」のミッション体験／プログラミングで光る飾りを作る／Octostudioを使ったプログラムで動くおもちゃづくり／ロボット×カニズム「持ち上げる」「つかむ・はさむ」を考える

この中で、学生が考案し、千葉県館山市と福島県浪江町で子ども向け実験教室として展開した「水と油の違いを利用した科学工作」を紹介します。

水にベビーオイルをゆつくりと注ぐと綺麗に水と分かれる様子が見られます。はじめはベビーオイルであることを明かさず、「魔法の水」と紹介し、水と綺麗に分離する液体は何かについて考えることで児童の好奇心を引き出そうと考えました。下から見ると境界面が全反射でキラキラと輝いて見えます。爪楊枝に色素の粉をつけて液に入れると、ベビーオイルは変化しませんが、水には色がつくことから、油に溶けず水に溶ける物があることを見つけることができます。また、液体に物が浮くか沈むかは、どちらが重いかによって決まることを知り、水と油の中間に物を浮かばせる面白さを感じながら作品作りを楽しむことができます。

Project

中学校での英語指導を深掘りした英語教育サロン

2024年11月16日、英語教育プロジェクトとして、「英語教育サロン」中学校での指導を考える」を、講師として横浜国立大学の 大場貴志先生をお迎えし開催しました。

このイベントは、2023年度の小学校での英語教育に関する議論に引き続き、2024度は中学校での英語教育をトピックとして、2部に分かれてハイブリッド形式で実施しました。

第1部では、大場先生から中学校における英語指導の現状について、第二言語習得論(SLA)に基づいたインプット、アウトプット、インタラクションを重視した指導法、言語活動と文法指導をバランスよく取り入れることの意義、更に内容重視の指導法(Content and Language Integrated Learning: CLIL)の重要性についての説明をいただきました。

また、大場先生のゼミ生が実践された中学校における文法を実際の言語活動に組み込んだ指導法例や、中学校の教科書をSoft CLILを用いて教える実践例が紹介されました。最後に、令和5年度の文

部科学省学力調査結果を基にした今後の指導方法についての考察もお聞きしました。

第2部では、第1部の内容をふまえて、参加者が3つのグループに分かれて英語教育について活発な意見交換をしました。このディスカッションを通じて、参加者同士が学校種を超えた英語教育に関する意見やアイデアを共有することができました。そして、参加者同士のネットワークが広がり、今後の教育活動に役立つ知見が得られる貴重な機会となりました。

2025年度にも英語教育サロンの第3弾を予定しており、参加者の方々の日々の英語教育に役立つ議論をより深めていく機会を提供したいと考えています。



私学教育とは何かを問い続けて

私学教育研究プロジェクトは、研究所の設立と同時にスタートし10年を迎えます。私立中高に勤務している教師を中心として、私学のあり方を考えてきました。

どうして私学教育のことを考える必要があるのでしょうか。それは私学の置かれた立場の二面性があるためです。日本の場合、私学は国公立学校と並んで「公教育」を担うものです。法令の規定で国公立と私学で違いがあるのは、私学が宗教教育を行えるという点だけで、他は同じ扱



いです。他方で私学には「建学の精神」があり「独自の教育」が期待されます。そのため、私学は教育委員会とは無関係であり、初任者研修など教員研修も法的には義務づけられていません。中教審などの議論でも、あまり私学のことは考えられませんが、それは「自主性の尊重」でもあると同時に、「私学の放置」にもなります。そのため私学は、「公教育の中の独自性」という課題を常に抱えています。

ところで、私学は法的には企業と同じで、顧客（生徒）が集まらなければ成り立ちません。少子化が急速に進行する中で、私学の一番の課題は「生徒確保」になり、そのため様々な工夫をこらすこととなります。ただそのような「経営」の論理が優先すると、横並びになりやすく、学校の独自性が失われるというジレンマに陥ります。

トや、教員育成セミナーを行ってきました。その中で改めて見えてきたのは、私学の要は「人」（経営陣と一般教員）であるということです。公立と違って定期的な人事異動の制度がない私学は、良くも悪くもメンバーが固定化します。それは「マンネリ」や「悪しき伝統主義」となることもありますが、逆に、理念を追求しじっくりと実践できることにもつながります。また多様化する教育ニーズにきめ細かに対応することもできます。

生徒に寄り添い、人間的な成長を促す教育を追求することこそ、私学教育の存在意義であると考えています。プロジェクトのメンバーは入れ替わっていきませんが、今後とも私学教育についての情報発信を行います。

私学教育研究プロジェクトでは、このような問題意識の中で、私学の教員研修についてのアンケー

2024年度 昭和女子大学 現代教育研究所 私学教育研究プロジェクト

教員育成セミナー

講師 御前田 貴宏氏
学校法人東睦学園 御殿場西高等学校長

次世代の私学教員をどのように育てるか
～学校改革と教員育成～

11月24日(日)13:30～16:00
昭和女子大学 6号館5階 5543教室
(東急田園線御殿場駅 三軒茶屋駅から徒歩7分)
※状況によりオンライン実施とする場合があります。

右記のQRコードまたは当研究所HPからお申込みください
<https://content.swu.ac.jp/rome/>
11月17日(日)申込締切

現代教育研究所紀要 第10号



<論文>

西欧と日本の文法教育の歴史に関する比較考察 (鈴木 円)

ネパール人日本語学習者のEngagementの5か月間の変化とその要因 (大野 直子)

ビジネスパーソン教育でのディベート学修における実践知の体得にむけた「型」としての参照モデルの適用 (高雄 慎二・薬袋 貴久)

<研究ノート>

性的少数者に関わる教育の課題－ユネスコの取り組みと日本の現状から－ (友野 清文)

小学校音楽科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に関する一考察－合唱の事例をもとに－ (赤塚 太郎)

教育デザインの開発をめざした予備的研究－アクティブ・ラーニングの再整理－ (田島 宏一)

<実践報告>

ひきこもり当事者の居場所を創る試み－まったりサロンいっば設置の取り組みに関する実践報告－ (葉山 大地・藪下 敏)



昭和女子大学現代教育研究所
Institute of Modern Education
Showa Women's University

現代の教育課題の探究と本学園の存立理念の確認という

二つのテーマを柱とした研究所です。

現代教育研究所は、現代の教育課題の探究と本学園の存立理念の確認を目的とした研究所です。総合学園として学内のネットワークを構築するとともに、学外の研究者、教育関係者はもとより、様々な教育機関や研究機関と広く連携を図り、研究成果や提言の発信を行っていきます。学園内外でのネットワークを深め、時代の流れに敏感でありつつ、それに流されることなく教育について自由闊達に議論考察を行い発信する拠点としたいと考えます。

WEBSITE : <http://iome.jp/> **MAIL** : kyoikuken@swu.ac.jp

昭和女子大学教職課程研究報

EduMate
vol.9

■編集■

EduMate 編集部

■発行■

昭和女子大学現代教育研究所

■発行日■

2025年3月2日